人のために生きる、ということの素晴らしさを知った日、私は絶望した。

私はどうやら自分のためだけに生きてきたらしい。そのおかげで得たものはおそらく世に生きるほとんどすべての人が求めて止まず、またうらやむものだが、過剰な供給はあっても意味がない。形あるものであれば蓄えられるが、形ないものや使い切れないほどの財産となってはまったく意味がない。

だからと言って、今さらに考え方を変えることも、自分の選り好みする癖を正そうとも思わなかった。それは過去の自分に対する裏切りに他ならないからだ。

私は大事にしたい人のみをとことん大事にすると決めた。

正月、兄家族と実家で会った。もう何年も仕事を理由にして帰ってはいなかったが、それでも邪険にされなかったのはみんなの性格が良いおかげなのと、毎年必ず全員の誕生日と父の日母の日に贈り物をしていたからだと思う。それでも、出迎えてくれた笑顔はとてもありがたいものに感じた。

甥と姪は大きくなっていた。甥は来年中学生、姪は来年高校受験を迎えるという。最後に会ったのは幼稚園児や小学校低学年の頃だったから、その変わり様と変わらなさについ笑った。

甥は不思議な顔をして、姪は「お父さんと似てないんですね」とはっきりと言ってきた。

私は肯定した。

「だから田舎に住んでるんだよ」

とも。

「田舎？　どこの？」

甥が思いのほか食いついてきた。私はそれだけでうれしくなった。姪は弟の様子に驚いたようだった。わかりやすく目を開いている。目元が兄に、驚き方が義姉に似ている。

「九州だね。いい場所だよ。不便で」

「……不便なのに？」

「便利であることは必ずしも良いことじゃないんだよ」

「ええーよくわからないなあ」

姉はやはりはっきりと言い、

「たぶん、僕も……叔父さんと同じふうに思ってるかもしれない……」

弟は手探るように言った。

「そうか、まあ、わかったりわからなかったりするよ」

「ふーん」と言って姪はよそへ行ってしまったが、甥は何か言いたげに黙りこくったままになった。何を言いたいのかは言われなくてもわかった。

「お父さんとお母さんに許してもらったら夏休みにでも遊びに来るか？　飛行機代は出すよ」

ついそんなことを口走ってしまったのはきっと自分に似ているところがあったからで、輝く目を向けられてその提案は正解だったのだと知れて私は嬉しく思った。